



Title	ベルクソンの二元論
Author(s)	桑山, 英一
Citation	カルテシアーナ. 1985, 6, p. 37-61
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66905
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ベルクソンの二元論

桑 山 英 一

序 論

『物質と記憶』の主題は、従来の二元論と異なったベルクソン独特の二元論を提唱することである。ベルクソンは、精神の实在性と物質の实在性をもに肯定し、しかも両者の間に本性の相違を認めるとともに、従来の二元論が解決し得なかった問題——精神と物質、精神と身体の結合の問題——に解決を与えようとする。

ベルクソンは経験に与えられる事実を検討、吟味しつつ、精神と物質、精神と身体の区別と結合のメカニズムを解明している。そこで、ベルクソンに従って彼独特の二元論の本質を理解していこうとするのが、本論の課題である。大体のところ次のような手順で進めていきたいと思う。

『物質と記憶』において考察の対象とされている経験の事実は、その主なものを挙げれば、行動（運動）、知覚、記憶（力）である。ベルクソンは行動を軸にして知覚と記憶を考察し、二元論の正しさを論証している。まずこの論証をIでとりあげる。ベルクソンは行動を考察の基軸に置いているのだが、決して一義的な意味で使っているように思われな

い。というのは、知覚は行動へと展開され、記憶はそれ自身では行動へと展開されないことにベルクソンは知覚と記憶、換言すれば物質と精神の間の本性の相違を見る一方、他方で、行動は精神と身体の結合の存在理由であると述べているからである。そこで、本性の相違の基準になる行動は、如何なる意味をもっているか、またこうした行動はどのような意味で精神と物質、精神と身体との結合の存在理由になり得るか、順にⅠ、Ⅱで考察していきたい。

Ⅰ 二元論の論証

ベルクソンは、「イマーシュの総体」としての、「事物と表象の中間にある存在」としての、物質の実在性を論証しようとする。

物質をイマーシュとすることは、物質を知覚している事実と合致している。ベルクソンはこれを問題の解明の第一の手懸りとしている。勿論、ベルクソンが批判の対象にしている実在論も観念論もこの事実を等閑視しているわけではないだろう。問題は、このような事実に対して、より説得力のある仮説を提出できるか否かという点につきる。実在論は、自然現象の不変の秩序、即ち物質をわれわれの知覚から区別される原因のうちに見ている。観念論は、知覚が実在のすべてであり、自然現象の不変の秩序は、現実的知覚の傍らに可能的知覚を表現するための象徴であるとする(MM 70)。われわれは、物質から区別される知覚が物質に再会できるか否か、現実の知覚から物質である可能的知覚を構成できるか否かを問わなければならないだろう。

物質の実在性について異なる態度を取る実在論と観念論は、ベルクソンによれば、知覚については同じ様な考え方をしている。即ち、知覚を「外部へ投射された主観の状態」(MM 70)とする考え方である。ベルクソンはこのような考

え方に導くいくつかの誤謬を挙げているが、その一つに次のようなものがある。知覚は、身体に及ぼす対象の作用の増大によって感情になる。例えば、われわれはピンにさわっているうちに苦痛を感じるようになるのである。逆に、対象の作用の減少によって、感情―苦痛は知覚へと外化された表象となる(MM 53)。感情は私の人格的存在に結びついており(MM 53)、感情的状態は延長を持たないように見えるから(MM 52)、知覚を「外部へ投射された主観の状態」と考えるようになる。ベルクソンは、物質との再会の可能性、構成の可能性の問題を、このような知覚が果して可能か否かという形で問題にしている。なぜなら、ひろがりをもたないものが、どうしてひろがりを受けとるかわからないし、ひろがりを受けとることを認めるとしても、どのような理由によって空間の一定点に位置を占めるようになるのかわからないからである。

ベルクソンは、理論一般つまりこれまでの哲学を括弧に入れ、経験の事実に則して問題を検討していく。「すると私は今、できるだけ漠然とした意味に解されたイメージ即ち私が感官をひらけば知覚され、とざせば認められない幾多のイメージを前にしているわけだ」(MM 11)。イメージは二種類に区別される。一つは、総体としてあるイメージつまり物質であり、一つは、そのイメージのうちで私の身体という特定のイメージに関係づけられたイメージ、つまり物質の知覚である(MM 17)。この二つのイメージの体系において考えるならば、一方のものが他方のものの原因であることは不可能である。つまり、「外部へ投射された主観の状態」である知覚が物質を構成すると考えることも、その知覚の原因を物質であることも不可能である。なぜなら、ベルクソンによれば、各々の体系は自足していて他の体系を含んでいないからである。

實在論と観念論は、知覚を「外部へ投射された主観の状態」とする。そのため知覚と物質の間に如何なる接点も見出

し得ない。ベルクソンは、このような知覚を全く観想的な関心 *un intérêt tout spéculatif* を持った知覚、純粹認識 *connaissance pure* と見做された知覚だとして、實在論と観念論を批判している (MM 24)。

ベルクソンは、物質的世界にまず身を置き知覚を説明していくのであるが、事柄を單純化するために記憶力を除いた知覚即ち純粹知覚を想定する⁽¹⁾。身体とりわけ脳を知覚を生む機能を持つものと見做すことも可能であるかのように思われるが、経験の事実に従って物質をイマージュと仮定し、また知覚もイマージュたる限りに於いて物質と何ら異なるものでないということから、脳が知覚を生ずるとき、物質的世界の一部である身体が物質的世界全体を含むという單純な矛盾に至る。従って、それを不可能と断定できるのである。ベルクソンは、物質的世界とその一部である身体との間ばかりでなく、脳と身体の他の部分との間に如何なる本性の相違も認めない。「脳のいわゆる知覚能力と脊髄の反射機能との間には程度の相違があるだけで本性の相違はない」(MM 19)。

ベルクソンは知覚と行動の關係に目を向ける。神経系の發達は、ますます必然的でなくなっていく行動に至る。そして、知覚の發達はこの神経系の發達に従っている。つまり、知覚の増大する豊かさは、生物の事物に対する行動において生物の選択に委ねられる不確定の部分が増大することに対応している (MM 27)。知覚の広さは後続する行動の不確定性の精確な尺度である (MM 29)。以上のことから明らかなように、ベルクソンは、物質の知覚をイマージュと解された物質的世界と行動の不確定性とから理解しようとする。

イマージュの現存 *présence* は物質自身であり、イマージュの表象 *représentation* は意識的知覚である。イマージュの現存として捉えられている物質的世界は潜在的知覚であって、その減少によって潜在的知覚は現実的な知覚に変わる。そして、行動の不確定こそがイマージュの減少をもたらすものである。物質の運動は「時さえ来れば、必然的

な作用がおのずから成しとげられる」(MM 15) ものである。それは、「受けた作用に対して直接的な反作用によって応える」(MM 236) 運動である。不確定を伴った行動、自由な行動は、それに反して、「実質的に可能なくつかの進路の中から」(MM 15) 決定を下されるものである。それは、行動の誘因を含みながら、待機すること、何もせずにおくことさえ可能であるような種類のものである (MM 12)。行動への傾向を伴いつつ、現実的な行動にうつされていない状態を、ベルクソンは可能的行動 (作用)、潜在的行動 (作用) *action possible*, *action virtuelle* と呼んでいる。ベルクソンによれば、われわれが持つ知覚は、この可能的行動、潜在的行動が現出したものである。「物質についての私たちの表象は、物体にはたらきかける私たちの可能な行動の尺度である」(MM 34)。「諸対象は、その現実的作用のあるものを捨て、その潜在的作用、つまり生物がそれらに及ぼしうる影響を現出させるだけのことであろう」(MM 35)。可能的行動 (作用)、潜在的行動 (作用) は行動の不確定性であるから、「不確定の諸地帯は、ただ現実的作用を通過させて、潜在的作用を残留させるだけだ」(MM 36) とも表現される。こうしてイメージの現存はイメージの知覚になる。ベルクソンは、實在論と観念論を斥けて、物質の實在性を、しかもイメージとしてある物質の實在性の仮説を導き出しているのである。

2

完全な知覚 *perception complète* のうちには、知覚が知覚される対象と一致する非人格的基底 *un fond impersonnel* とともに、われわれの人格に属しているイメージ、外化された (つまり思い出されたイメージ) *images qui nous appartiennent personnellement, images extériorisées (c'est-à-dire, en somme, remémorées)* があ (MM 69)。身体が表象の原因でないとするならば、後者は物質的世界のうちに与えられていないのだから、物質と全く異なったも

のとしなければならないだろう。つまり、われわれは精神と物質との間に本性の相違を見なければならないだろう。だが、ベルクソンによれば、それはまだ事実によって確認⁽²⁾されていない。「物質と記憶」第二章の課題は、記憶力の経験的研究によって第一章で得た結論に検証を与えることである。

ベルクソンが第二章で扱っている再認 *reconnaissance* とは、「過去を現在の中で把握しなおす具体的行為」である。連合論は、こうした行為を知覚と記憶の連合によって理解しようとする。つまり、「対象は感覚を刺激し、感覚は眼前に諸観念を出現させ、各観念は知的実質を徐々に深いところまで揺り動かしていく」(MM 113-114) 機械的過程として、換言すれば、各々自足する知覚、記憶、観念という三つの項を想定して、知覚から記憶、記憶から観念へと進む過程として再認の行為を捉えようとする。それは記憶のうちに惰性的性質を見ることがある。ベルクソンによれば、記憶には二つの要素がある。記憶形象 *image-souvenir* と運動 *mouvement* である。ひとはその混合的な現象を単純な現象と取り違える。そのため、運動の基体である身体が同時に意識的なイマジューの基体であると考えるようになる (MM 95)。つまり、記憶形象は脳に蓄積されていると考えるわけである。こうした考え方と連合論の惰性的な記憶の説とは相呼応している (cf. MM 98, 130)。そこでベルクソンは、精神の実在性を証明するに当って次のように問題を設定するのである。「知覚が機械的に記憶の出現を決定するのであるか。それとも記憶が自発的に知覚の面前に姿をあらわすのであろうか」(MM 107-108)。脳—物質と記憶—精神の関係をどう考えるかは、問題の解答如何にかかっているのだ。ベルクソンは後者の立場即ち精神の実在性を肯定する。記憶の自発性と精神の実在性は一つのことなのである。ベルクソンが「物質と記憶」第二章で連合論を批判対象としているのはそうした理由からである。

ベルクソンは記憶の二形態 (学課の記憶 *souvenir de la leçon* と音読の記憶 *souvenir de la lecture*、獲得された

記憶 *souvenir appris* と自発的記憶 *souvenir spontané*、あるいは習慣記憶 *souvenir-habitude* と形像記憶 *souvenir-image* の区別から始める。習慣記憶は、身体つまり運動機構において存続し、それは行動であり、自動的に働くものである。そして、それは現在に位置を占めている。形像記憶は、独立的記憶において存続し、表象であり、過去に位置を占めているものである (cf. MM 82-87)。再認の行為はこの二種類の記憶によっておこなわれる (対象に原因を持つ運動による再認と、主体から発する表象による再認)。例えば、町に住み始めたころには、知覚はそれに伴う明確な運動を組織していなかったが、長く住むにしたがってはつきりした知覚をもたないで機械的に歩きまわるようになるだろう。運動は、知覚を無用にするまで組織されるのだ。従って、ベルクソンは、「再認の基礎には、運動的な或る種の現象が、たしかに存在するようである」と言うのである (MM 100-101)。運動によっておこなわれる再認を、ベルクソンは非注意的再認と呼び、形像記憶の介入する再認を注意的再認と呼んでいる。

課題の性格上、ベルクソンは注意的再認を主題的に考察している。注意的再認には形像記憶ばかりでなく運動による再認が要素として含まれているのだが、その主役を演ずるのは形像記憶である。それは、「現在の状況の前後に起こったことのイメージを提示してその選択に光をあててやること」(MM 95)を役割としている。ベルクソンによれば、知覚を「印象の収集」、あるいは「精神によるその仕上げ」とするのは誤っているのだ。知覚は、「精神とその対象との深い連帯」(MM 114)、「閉じた回路」(ibid)のうちに成立しているのである。つまり、判明な知覚は、「精神に引き入れられる知覚形像と空間へ投げ出される記憶形像とが互いに後続して走る」(MM 113)このうちに成立しているのである。自足した知覚があつて、それに記憶が機械的に付け加わって判明な知覚が形成されるのではない。少なくとも記憶の介入をまって成立する知覚において、記憶の介入以前に自足してある知覚を想定することをベルクソンは拒否し

ている。他方、注意的再認において運動の果す役割は、最早知覚を延長して有益な結果を引き出すことではなくて、対象の輪郭を再びたどることにある (MM 107, 110)。それは、「知覚と思ひ出されたイメージの共通の枠」(MM 112)として役立つのである。

ベルクソンは、注意的再認の障害のうち、特に語の聴覚的記憶力の障害を考察の対象としている。そこで右の記述に対応する障害の二つの原因を想定している。(一)傷害が、うけとった興奮を継続し、自動的に遂行される運動にかえる機構を犯す。(二)傷害は、必要な先行感覚を与えて有意的運動を準備する特殊な中枢を犯す。前者によって、記憶の選択がそれによっておこなわれる確な態度を自動的に取ることができなくなる。また、後者によって、記憶は身体の中に適合する支点、行動へと発展する手段を見いだせなくなる (MM 118)。

(一)われわれが、二人の人物が未知の言葉で話しているのを聞いているとしよう。二人は、互いの発言のうちにはっきりした言葉を聞き取るのだが、われわれは、そこに混乱した雑音を知覚するだけである。そこでベルクソンは問題を次のように立てる。「たんに記憶にすぎぬある国語の認識が、いかにして現在の知覚の内容を変化させ、一方の聞き手にとって、他の聞き手が同じ物理的条件のもとで聴きとれないものを聴きとらせるのか」(MM 120)。ベルクソンは、このような相違は運動図式 *schème moteur* の有無に由来すると考える。それは、「きき取った語句を分解したり、その主要な分節を標示する能力のある初発的運動 *mouvements naissants*」(MM 121)のことで、聴覚的印象が組織するものである。

言語聲にかかった患者はちょうどわれわれと同じ状況に置かれている。連合論的な考え方に従って、そこに次のような原因を想定することも可能であるかのように思われる。即ち、語の聴覚的記憶が皮質内で破壊されているか、皮質性

の、あるいは皮質下の損傷が聴覚的記憶による観念の喚起や、知覚の記憶との再会を妨げていると想定するのである。しかし、聴覚的記憶と聴覚を完全に保存している患者の場合、聴覚的記憶も聴覚的印象も意識に達するはずである。にもかかわらず、言葉を再認しないのであり、記憶と印象の結合が行われないのである。それは、最早生理学の問題ではなくて、心理学の、意識過程の問題である。言葉の理解力を失った患者に音節ごとにくぎって何度も発音してやると理解力をとりもどすという症例などを挙げながら、ベルクソンは運動図式の欠如こそ記憶と知覚の結合を妨害するもの、意識のうちに空隙を生むものであることを明らかにする。このようにして、再認の行為を生理学の問題に還元する考え、記憶のありかを脳に見いだす考え方の一つの可能性が、ここで否定されているのだ。

(二)脳が記憶を貯蔵するという仮定、それは、記憶を惰性的で受動的な事物 *chose inerte et passive* であると考え、ことに等しいのだが、ベルクソンによれば、そうした連合論的な考え方と事実との間に様々な不一致を指摘することが可能なのである。

もし皮質の細胞に記憶が貯蔵されるならば、一定の語の回復不可能な喪失と他の語の完全な保存を確認するだろう。しかし、実際は、精神的な聴取力が全く廃滅して記憶の全体が消滅するか、その能力の一般的衰弱が生じるか、そのいずれかであるが、後者の場合一定の数の記憶の消滅が対応するわけではない。しかし、一定の記憶が消滅するように思われる場合がある。ベルクソンはそれを二つの型に分けている。(A)消滅は突然起き、消滅する記憶は偶然に気まぐれに選ばれる。(B)消滅は漸次的で、消滅の仕方は方法的文法的である。即ち固有名詞、普通名詞、動詞の順序で消滅する。ベルクソンはまた両者の間に次のような相違を見ている。(A)ある患者がFの文字のみを忘れた場合、もしFの文字を予め潜在的に再認していないならば、この特定の文字のところに来る度にそれを如何にして削除するのか理由がわか

らないだろう。そこで消滅したと見做される記憶は実は現存し、活動しているとベルクソンは考えるのである。(B)記憶のあり方を皮質の細胞のうちに求めるならば、この消滅の仕方は不可思議なものとなる。なぜなら、病気が常に同じ仕方で細胞をおかすとは考えられないからである。ベルクソンは、消滅の仕方の原因を言葉の記憶を実現する能力 *faculté d'actualiser les souvenirs des mots* の漸次的縮小に求めている。記憶が喚起されるためには一種の精神的態度が必要であり、この態度それ自身は身体的態度に結びついている。本来模倣可能な動作を表わす動詞は、言語の機能が消失しようとするときに、身体的努力によって回復可能な言葉である。固有名詞は、身体が図取りできる非人格的動作から最もかけはなれているものであるから、機能の衰弱によって最初に影響をこうむるというわけである。こうした事実から明らかに、病気がおかすのは、身体にかかわる記憶を実現する能力であって、記憶自身ではない。従って、記憶の消滅は脳が記憶のありかであることを意味してはいない。

さらにベルクソンは、同じ語が占める位置や結びつける諸項によって多数の異なった関係やニュアンスを表現するという事実を挙げて、記憶を自発的なものと考えなければならぬ必然性を示している。実際、再認の行為を連合論のように知覚↓記憶↓観念と進む過程とするならば、その事実は理解不可能になるだろう。「私たちは観念から出発し、運動図式にはまり込みながら、聞える音に重なっていく力をもつ聴覚的記憶形像へと、その観念を発展させる」(MM 138)。こうして形成された知覚を道標として、われわれは相手の観念に対応した観念に身をおきつつ思考の運動を展開する。

以上のことから、われわれは記憶の喚起の過程を観念に始まって知覚において完成される連続的過程と理解すべきであらう。しかし、病理学は、記憶の全体が消滅しても、対象を知覚する能力が存在しつづける場合があることを教えて

いる。精神盲は見ることを妨げないし、精神聾は聞くことを妨げないのである。こうした事実から、ベルクソンは、対象を知覚する感覚器官である耳とは別に、観念が記憶形像へと展開される、つまり有意運動が準備される器官を想定する。判明な知覚は、対象からくる求心的な流れと純粹記憶から出発する遠心的な流れから形成されると考えるわけである。

以上のように、ベルクソンは病理学的事実を積み重ねることによって形像記憶の障害はいずれにしても身体に関わっているけれども、それが身体に位置することから生ずるものではないことを明らかにした。

Ⅱ 二元論の意味

1

精神は物質から構成されるものではないし、物質は精神から構成されるものではないと主張する点で、ベルクソンの二元論は従来の二元論と何ら異なるところはない。しかし、両者の間には明らかな相違も存在する。従来の二元論は『エッセ』の言う等質的空間のうちに物質を置き、精神を空間の外に置くことによって、延長と非延長、質と量、あるいは自由と必然という和解不可能な対立をひき起こした。しかし、ベルクソンによれば、物質は等質的空間のうちにはないのである。否、等質的空間は実在ではないのである。それは、われわれが物質に働きかけるための行動の図式 *schèmes de notre action sur la matière* (MM 237) であり、知性が物質に帰する形式である。実際には、物質は、現在と過去の連帯をその本質としており (MM 245)、不可分なものであり、持続を占めている (MM 227)。少なくとも物質は記憶力―精神の徴候をもち、それを模倣している (MM 250)。『エッセ』で言われるような時間と空間の対立

を精神と物質の間に見てはならないのである。

物質に還元されない精神、精神に還元されない物質、両者の区別をわれわれは如何なる点に見るべきであろうか。ベルクソンは、行動 *action* を基軸にして純粹知覚（現在）と記憶（過去）を次のように規定することによって両者の間に本性の相違を設定するのである。「私たちの純粹知覚を構成するものは、これらの（物質の）イマジージュのただ中で、輪郭をあらわしはじめる生まれかけの私たちの行動である」（MM 71）。「現在は観念＝行動 *idéo-moteur* である」のに対して、「過去は観念に過ぎない」のである（*ibid.*）。また他の個所で次のように述べている。「私の現在は私の関心を占めているもの、私にたいして生きているもの、要するに私を行動へと促すものである」のに対して、「私の過去は本質的に無力で *impuissant* ある」（MM 152）。このようにベルクソンは、純粹知覚と記憶の間の本性の相違を、一方は必然的に行動へと展開するが、他方はそれ自身で行動へと展開する力をもたないことに見ている⁽³⁾。

ベルクソンは、本性の相違を記述するに当って、知覚、記憶、行動という用語のみを一貫して使っているわけではない。行動と並んで運動 *mouvement* という言葉を使い、また知覚とともに感覚 *sensation* という用語を使用している。ベルクソンは、「私たちの存在の物質性」を「感覚と運動の総体 *un ensemble de sensations et de mouvements*」と規定している（MM 154）。また、物質の実在性と精神の実在性を表現するとき、知覚と記憶の本性の相違と変わらないで、感覚と記憶の本性の相違と言って、感覚を運動を起こしうるもの *sensation capable de provoquer des mouvements*、運動の源泉 *source de mouvement* と規定している個所もある（MM 155）。*perception-action* と *sensation-movement* は、勿論全く同一の事態に対して言われているわけではないが、いずれにしても物質の実在性を示すものである。

ベルクソンは、物質的世界を構成するものを「あらゆる部分が互いに運動を通じて作用と反作用を交わす諸対象であり、あるいは、こう言った方がよければ、イマージュなのである」(MM 71)と言っている。つまり、自然法則に従って作用と反作用を行っているものであり、そのような作用と反作用は、「時さえくれば」必然的に行われるという性格のものである。ベルクソンは、このような物質的世界の在り方を根本的機械論と呼び、次のように詳しく説明している。それは、イマージュが「自己の各点によって、他のイマージュのあらゆる点に働きかけ、受けとるものの全部を伝え、各作用にたいしては、等しいが対立する逆作用をかえさざるをえず、結局、無際限な宇宙に波及する諸変化があらゆる方向に走るための通路にすぎない」(MM 33) ような必然性である。物質はこのように運動から運動へと必然的に展開するものであるから、「周辺の地帯を探索する必要もない」のであり、そこでは知覚は潜在的である。われわれの身体も、物質的世界の一部を形成していて、運動を受けたり返したりしながら、他のイマージュと同様に活動している一個のイマージュである(MM 14)。物質が mouvement→mouvement であるのに対して、身体の、行動のあるいは運動の取る特殊性故に mouvement は知覚あるいは感覚という形態を取るようになると言えるだろう。perception→action あるいは sensation→mouvement が、基本的に mouvement→mouvement という記憶＝精神に対して閉じた系に対応していることから、ベルクソンは、「私たちははじめから過去に身を置くのでなければ、過去に到達することは絶対にあるまい」と言いつて、精神と物質の二元論を主張する根拠にしているのだ。perception→action, sensation→mouvement の action と mouvement を物質の mouvement→mouvement の mouvement に対応するものとして間違いないであろうが、ここで両者の間にどのような類似あるいは相違があるか、考えてみよう。

言うまでもなく mouvement は『物質と記憶』で第一に物質的世界に対して使われる用語である。「物質界を構成す

るものは、あらゆる部分が互いに運動を通じて作用と反作用を交わす諸対象であり、あるいは、こう言った方がよければ、イマージュなのである」(MM 71)。不変の諸対象あるいはイマージュがあつて、それが運動を行っているようにも思われるが、ベルクソンは物質的世界のうちに運動のための不変の基体を決して認めない。ベルクソンによれば科学は「あらゆる物質点の間の相互作用」(MM 221)を、つまり物質は自己の各点によって他のイマージュのあらゆる点に働きかけ、受けとるものを全部伝えるもの、換言すれば、諸変化があらゆる方向に走るための通路(MM 33)であることを証明しているのである。物質とは運動のことである。だから、ベルクソンは『物質と記憶』第四章の問題を運動をもつて論じているのである。movement という用語は、第二に当然のことながら身体に対しても用いられる。「私の身体は、物質的世界の総体の中で、運動を受けつ返しつ、他のイマージュと同様に活動している」(MM 14)のである。また、身体内部の神経系についてもその役割を「運動を導き、合成し、あるいは阻止することである」(MM 19)とベルクソンは述べている。action という用語も、また同様に、物質的世界に対しても身体に対しても使用されるものであつて、その点で movement と何ら異なるところはない。例えば、「物質界のあらゆる点の作用 action」(MM 35)とか、「私たちの身体に及ぼされる対象の作用 action」(MM 53)といった使用例を挙げることができるし、身体への適用例として、「行動 actions をなしとげ感情を体験するという身体のもつ二重の能力」(MM 62-63)、「Sには身体のイマージュが集中する。またこのイマージュはPの一部をなしていて、平面を構成するすべてのイマージュから出てくる作用 actions を、受けたり返したりするにとどまる」(MM 169)など数多く確認できるであろう。従つて、使用範囲に関する限り movement と action は、物質的世界にもわれわれの身体に対してもともに用いられるものであることがわかるであろう。だから、また movement と action は共通の適用対象をもつことにもなる。ベルクソンは

「知覚は生活体の行動力 *puissance d'agir* すなわち受けた興奮に後続する運動 *mouvement* ないし行動 *action* の不確定を表現するものであり、これを示す尺度なのである」(MM 66) と言い、また「要するに再認ということは、二つの仕方で行われるのでなければならぬ。ある場合には、それは行動 *action* そのもので、……行われるであろう。他の場合には……」と述べ、すぐその後で同じ再認の仕方を「現在の対象の再認は、それが対象から生ずる場合は運動 *mouvement* によって行われ、……」と述べている (MM 82)。しかし、*mouvement* と *action* の使い方に違いを認めることも可能である。というのも、*mouvement* は物質の在り方を指しているものであるのに対して、*action* は物質 (*mouvement*) の他の物質 (*mouvement*) に対する関係を表現するものであることは、*action* の様々の使用例からも明らかであるように思われるからである。いずれにしても、*mouvement* と *action* はともに物質的世界に対してもわれわれの身体に対しても用いられるものであり、それらがわれわれの身体に対して用いられるのは、身体が物質的世界の一部であるからである。ベルクソンは行動を規定して「事物の中に変化を起こさせる私たちの能力、意識によって確認され、有機的身体のあらゆる力の集中点であるように見える能力」(MM 65) であると述べている。perception → action, sensation → mouvement の *action* と *mouvement* が、物質的世界とその一部であるわれわれの身体に帰せられるものであることに、そして物質の運動が他の物質の *mouvement* を引き起こすように知覚と感覚がわれわれを *action, mouvement* へ促すことに、反対に記憶それ自身には *action, mouvement* が伴わないことに、ベルクソンは精神と物質との間に本性の相違を見て取ったのである。

2

しかし、物質の *mouvement, action* とわれわれの身体の *mouvement, action* との相違点もまた顕著である。われ

われは、ヘルクソンが身体の *action* に対して潜在的 *virtuel*、可能的 *possible* と現実的 *réel* という区別をつけるが、物質の *action* に対してはそうした区別をつけないことに気付く。例えば、「事物への私たちの可能な働きかけ *notre action possible sur les choses*」「私たちへの事物の可能的作用 *l'action possible des choses sur nous*」(MM 57)、「自分の身体にたいする対象の潜在的作用あるいは対象にたいする自分の身体の潜在的作用 *l'action virtuelle de l'objet sur notre corps ou de notre corps sur l'objet*」(MM 59)、「私たちの身体の現実的活動 *l'action réelle de notre corps*」(MM 58)といった表現を見いだすことができる。こうした例からもわかるように潜在的、可能的と現実的の区別は、われわれの身体の *action* についてのみ言われることであり、たとえ周囲の物質的世界に対してそれが用いられるにしても、それはわれわれの身体の *action* との関わりにおいてのみ言われることであって、そうした関わりを持たない物質的世界の *action* には認められないのである。*action* が *mouvement* の他の *mouvement* に対する関係であることを思えば、われわれ身体の *action* と物質的世界の *action* との間に見られるこうした相違は、*mouvement* 自身にも及ぶはずである。それは、われわれの身体の *action* ばかりでなく *mouvement* に対しても言われる不確定性で表現される。(cf. MM, 38, 66)。 *mouvement*→*mouvement* ではなく、 *perception*→*action*、 *sensation*→*mouvement* の形態を取るのは、この不確定性によっているのである。

不確定性とは意志による不確定のことである。「意志による *volontaires*」とは、「わたし *je*」とか「われ *moi*」が原因であるということである。そして、「わたし」「われ」とは、空間的にも時間的にも身体を越えているもののこと、精神のことである (ES 30)。従って、*mouvement* *action* の不確定をヘルクソンは次のように説明している。「要するに、*corps* は時間において現在の瞬間にとじこめられ、空間においてある場所にかぎられて、自動的にはたらく、

外からの影響に機械的に反応するものですが、体とならんで空間において体よりもはるかに遠くにひろがり、時間において持続する何ものかがとらえられます。そして自動的に予知される運動ではなく、予知できない自由な運動を、体に要求し、強制する何ものかであります。すべての方向に体からあふれ出し、それ自身を新しく創造することによって行為を創造するものが「われ」であり、「魂」であり、「精神」であります」(ES31)。「物質と記憶」ではこのことを次のように述べている。「ある決意をせねばならぬ場合を考えてみよう。その人は、彼の経験の全体を、いわゆる彼の性格の内に集め組織しつつ、行動へと集中させるであらうし、私たちはそこに、行動の素材となっている過去とともに、人格が行動に刻印する予見しがたい形式を見いだすだろう。しかし、行動が実現可能なのは、現在の状況、すなわち時間と空間における身体の特定の位置から生まれる諸事情の総体の枠の中に、それがはいってくる場合しかあるまい」(MM 192-193)。つまり、身体の行動は、物質的世界の中で他のイマージュと同様に運動を受け、運動を返すという仕方で行われるものであるが、その主体は「わたし」であるということである。「私の人格とは、これらの行動を関係づけるべき存在である *ma personne est l'être auquel il faut rapporter ces actions*」(MM 46) とベルクソンは言っている。

同様にベルクソンは、空間的、時間的に身体を越えるという精神の働きを知覚のうちに見ている。「まず空間的にとというのは、……わたしたちは知覚の機能、とくに視覚の機能によって自分の体 *corps* を越えてひろがっているからです」(ES 30)。われわれの知覚が持続の一定の厚みを占めていること、それに精神が関与していることは、『物質と記憶』で指摘されていることだが、身体を時間的に越えるこの精神の働きを『精神のエネルギー』は次のように表現している。「体 *corps* は物質で、物質は現在である」のに対して、「意識は過去をとどめ、時間がくりひろげられるにつれて、その過去を意識自身に巻きこみ、それをもって未来の創造に寄与する準備をします」(ibid)。sensation もまた

精神の関与によって理解されるであろう。というのも、感覚は、知覚の存在から理解すべきものであり、「知覚すべき対象が私たちの身体と一致する場合」に生ずるものだからである (cf. MM 57-58)。

もし、従来の考え方のように「一方に知られざる運動をもつ空間を立て、他方にひろがりのない意識を立てる」(MM 73)とすれば、身体と精神、必然と自由は対立したままであり、身体の行動を照らすために記憶の力を借りるといふようなことも生じなかったであろう。しかし、ベルクソンによればそのような対立はないのである。「物質は必然であり、意識は自由であります。しかし、両者は対立しても何もなりません。生命は両者を協調させる手段を見つけます。それは生命というものが、まさしく必然の中へさしはさまれて必然を自分の利益になるようにする自由であるからです。物質の決定的な動きがその厳密さをゆるめられないとすれば、そういう自由は不可能でしょう」(ES 13)。ベルクソンは、『物質と記憶』でも同様の趣旨のことを次のように述べている。「もし自由な行動、あるいは少なくとも部分的に不確定な行動があるとすれば、その行動は、自己自身にあてがわれる生成に間を置いて眼を注ぎ、その異なった諸瞬間を固定しつつ、こうして物質を凝縮し、また物質を同化しながら、自然必然性の網の目をくぐるような反作用の運動に消化していく能力のある諸存在にのみ属することができ」(MM 236)。精神と物質の結合である知覚から出発するベルクソンにとってこのような説を提出することは当然のこととしなければならないが、精神と物質の実在性を肯定し、両者の間に本性の相違を認めることを考えるならば、なお疑問を提出する余地があるだろう。しかし、こうした疑問も、『物質と記憶』での物質の実在性の証明の仕方に注目すれば、ある程度解消するのではなからうか。ベルクソンは物質の実在性を直接に定立しているのではない。まず知覚を分析し、純粹知覚を見いだす。そして、この「精神の最低段階——記憶力のない精神——ともいうべき純粹知覚」(MM 250)が精神の実在性と異なった物質の実在性を見せるので

ある。しかも純粹知覚は、「知覚と知覚される対象の一致」(MM 68)‘物質と記憶力との部分的合致’(MM 250)‘換言すれば物質的世界の一部分’(MM 202)なのである。

ベルクソンは、實在論、観念論、あるいは従来の一二元論を批判して、「一方に、知られざる運動をもつ空間を立て、他方にひろがりのない意識を立てるような必要はまったくない。反対に、まさしくひろがりのある知覚においてこそ、主観と客観はまず結びつくであろうし、……」(MM 73-74)と述べ、精神と物質の結合の事実から出発すべきであることを説いている。われわれは、ベルクソンが純粹知覚のうちに精神と物質の結合と分離の理論的可能性を見、‘perception→action’、‘sensation→mouvement’のやうな ‘mouvement→mouvement’ と同一の側面とそれを越えている側面を見ているのを確認した。だからこそベルクソンは次のように言い得るのである。「これに対して、精神の最低の役割すらも事物の持続の継起的諸瞬間を結びつけることであって、精神が物質と接触をもつのはこの操作においてであり、また物質から区別されるのもこの操作によってであるとすれば、物質と完全に発展した精神との間には無数の段階 *degrés* があり、精神にはたんに不確定なばかりでなく理性的で反省的な行動の能力があると考えられる。生活の強度の増大を示す尺度であるこれら継起的段階の各々は、持続のより高度な緊張に照応し、感覚運動系統のいつそうの発達を通して外にあらわれる」(MM 249)。こうした持続の緊張に照応する、われわれが位置を占める一定の段階を、ベルクソンは持続の特殊なリズム *rythme particulier de durée*‘一定のリズムを持つ持続 *durée au rythme déterminé* と呼んでいる。われわれの意識によって生きられる持続はこうした持続であり、またわれわれの行動はこうした持続を条件としているのである (MM 230, 233)。われわれの知覚が主観と客観の結合であるのも、即ち一定の持続の厚みを持つのも、また物質的世界の中でわれわれが身体を介して新しいことをつけ加えるのも、こうした事情によっているの

である。

以上のように、ベルクソンの二元論は、本性の相違を認めながら、それが精神と物質の結合を決して妨げるものではないのである。

Ⅲ 精神と身体

一般に精神と物質の関係の問題は、純粹知覚の記憶力による収縮と弛緩の関係によって理解されるものである。しかし、さらに、ベルクソンが『物質と記憶』で主題的に論じているもう一つ別の問題が、即ち精神と身体の関係の問題がある。それは、「記憶力を現実へと向け、現在に結びつける唯一の機能」(MM 198)を身体に帰する問題、脳が「有益な記憶を喚起するに役立つが、さらに他の記憶を暫定的に斥ける」(ibid)働きをもつという問題である。換言すれば、記憶は、身体の如何なる部分にも位置するものではないが、現在の呼びかけに応じて身体(感覚⇨運動機構)から熱気と活力を得ることによって、物質化し、現在の状態に移行する、とベルクソンは言うが、それを如何に理解すべきかという問題である。

行動を照らすために、形象記憶の喚起をもつてする注意的再認に対して非注意的再認の果す重要な役割を、ベルクソンは次のように述べている。「知覚は私たちを将来へと推し進めるだろう。私たちは過去へ退かなければならないのだ。この意味では、運動はむしろイマジニを遠ざけようとする。けれども、ある面から言えば、それはイマジニを準備してくれもする。というのは、私たちの過去のイマジニが全部そのまま現存しているとしても、やはり現在の知覚と類比的な表象が、可能なすべての表象の中から選ばれなくてはならないからだ」(MM 103)。ゆゑ perception→action、

sensation→movement を物質的世界の mouvement→movement と同一水準に置くならば、なぜ運動がこの選択を準備するのか、なぜ私たちがとりによくイメージの場を限るのか (ibid) 解らないであらう。というのも、物質的世界の mouvement→movement は精神に背を向け、物質の実在性を示すただだからである。一方では記憶の喚起を妨げ、他方ではそれを助けるといふこの運動の二面性は、先に述べた perception→action、sensation→movement の二元性に則して理解されなければならないだろう。即ち、純粹知覚が物質の実在性を示すと同時に物質と記憶の部分的合致であるように、perception→action、sensation→movement は mouvement→movement の側面を持つているともにその側面が同時に精神—記憶力による「未来をめざしての過去と現在の総合」であるわれわれの持続の「流れつつある瞬間」であるということである (cf. MM 152-153)。われわれは、精神と身体の関係をわれわれの持続において考察しなければならないだろう。

ベルクソンは、習慣記憶 (感覚—運動系の総体) と形像記憶の結びつきについてこうした観点から次のように述べている。「過去の行動の蓄積された努力を象徴する諸機構をもつ身体の上で、思い浮かべ反復する記憶は宙に浮いていた。しかし、私たちは直接過去以外に決して知覚することがなく、私たちの現在の意識はすでに記憶作用であるとすれば、はじめに分けておいた二項は密接につながって一緒になろうとする」(MM 168)。つまり、身体は、「あるひとつの瞬間だけを考えれば、それに影響する対象とそれが働きかける対象の間に介在する伝導体にすぎない」のだが、「流れる時間にもどして見れば、私の過去が行動へと移り変わるちようどその点に、必ず位置している」という二面性をもってしているのである (MM 82-83)。従って、ベルクソンは習慣記憶と形像記憶の関係について次のように言うのである。「両者はばらばらな二つのものではなく、第一のもの (習慣記憶) は、第二のもの (形像記憶) によって経験の動く平面に

さしこまれる動的先端にはかならないから、この二つの機能が互いに支持を与え合うことは当然である」(MM 169, cf. MM 198)。

純粹知覚と記憶、習慣記憶と形像記憶の区別をヘルクソンが理論的なもの en droit (MM 31) 'théoriquement' (MM 86) と言っているように、これらの区別は、われわれの持続のうちで具体的な形態をまとして現われるのである。ヘルクソンは、そうした事態を『物質と記憶』第三章の、過去と現在の本性の相違によって表現しているように思われる。言うまでもなく、われわれの持続における具体的区別は、理論的な区別に基づいて理解されるはずのものである。ヘルクソンは『エッセ』で持続を「諸要素の相互浸透、連携、内面的有機化」(DI 75) だとして、次のように述べている。「まったく純粹な持続とは自我が生きることに身をまかせ、現在の状態とそれに先行する諸状態とのあいだに境界を設けることを差しひかえる場合に、意識がとる形態である」(DI 74-75)。ヘルクソンは、『エッセ』の持続は過去と現在の区別を生じないものだと考えている。『物質と記憶』の持続と『エッセ』の持続の、こうした相違を、J・イポリットは次のように説明している。『エッセ』の持続は、抽象の努力によって空間と物質的事物から分離された純粹持続であり、自由は自己と自己自身の不可分な全体によって定義される。それに対して、『物質と記憶』の持続は、事物との関係にある持続であり、そのため精神の飛躍は限られており、精神の、生命への注意は制限されている。こうして精神自身のうちに精神が離れる過去と精神がつく現在との間に区別が生ずる。⁽⁴⁾私の現在は、持続のうちに「流れつつある」部分、「私を行動へと促すもの」(MM 152) である。私の過去は、「すでに流れた」部分、「本質的に無力である」(ibid) もののことである。

こうした精神と身体の間を、ヘルクソンは『物質と記憶』第三章で、平面 P (宇宙にかんする私の表象) に頂点 S

で接する逆円錐形 SAB で図示している。 S は感覚＝運動機構を表わし、底辺 AB には記憶の全体が配置されている。そして底辺 AB と頂点 S の間の切断面 $A'B'$ 、 $A''B''$ ……によって精神生活の無数の反復を表わしている。われわれの精神生活は底辺 AB に接近するに従って無数の個別的イマジニという相を呈し、反対に S に向うに従って身体的態度というはっきりとした形をとる (MM 180-181)。

唯名論、概念論、連合論に対するペルクソンの批判は、右の図式が如何なる意味をもっているかをわれわれに教えている。ペルクソンは唯名論と概念論を批判して、両者がともに個物の知覚を前提していると言っている (MM 176)。対象の個性は特殊性に対する反省を必要とするものであり、また類の概念は表象から時間と場所の特殊性を除去する反省の努力を必要とするから (MM 176)、ペルクソンは個物の知覚からも類の概念からも始めない。それらは反省によつて後から与えられるものである。

観念連合の解釈における連合論的考え方の無力も、同様の誤謬に基づく。連合論は観念連合の事実を機械的付加によつて説明しようとする (MM 184)。つまり、観念やイマジニをそれぞれ内なる空間を浮遊する、独立的存在とするのであるから、偶然だけが連合の事実の理由となるわけである。しかし、ペルクソンによれば、連合論が独立的存在と考えるものは、人為的な、精神が後から生じさせる産物である (MM 183)。「実際は、我々は互いに類似する個々のものに先立って類似を知覚するのであり、近接した諸部分に先立って全体を知覚する」 (MM 183)。つまり、直接的意識に不可分な全体として与えられている心理的諸事実の連帯があり、反省がそれを個々の断片に、独立的存在に変えるのである。

こうした批判から明らかなように頂点 S も底辺 AB も、切断面 $A'B'$ 、……も、われわれに与えられているものではない。

い。それらはわれわれの持続のうちに、言わば潜在的に含まれていて (cf. MM 114-115) 、生命への注意の規制に基づいて持続の各瞬間に生起するものである。「したがって結局、精神生活にはさまざまな音色があり、われわれの心理的生活は、生命への注意の程度によって、ときには行動に近づきつつ、ときには行動から遠ざかりながら、高低さまざまな奏せられることができる」 (MM 7) とベルクソンは述べている。

精神と物質、精神と身体の関係についての過去の考察は、ベルクソンによれば、いずれも空間的区別をその本質としている。それは、物質を空間のうちに置き、精神を空間の外に置くことによって程度を許すことを不可能にし、推移を不可能にする (MM 249) 。これに対してベルクソンは、精神と物質、精神と身体を考察するに当って、その基本的指針として時間的区別の立場を取った。「第一の仮説、すなわち心身の区別を空間の言葉で言いあらわす仮説においては、身体と精神は、直角に交差する二個の鉄道のようなものだ。第二の仮説では、レールは曲線に沿って接続しているわけで、知らず知らずのうちに、一方の鉄道から他方へ移っていくことになる」 (MM 250) と述べているが、生命への注意に規制されたわれわれの精神生活は、ベルクソンのこうした考え方を最もよく表わしていると言えよう。

注

(1) 純粹知覚 perception pure は次のように説明されている。「事実上ではなくむしろ権利上存在する知覚と解していただきたいのである。これは、私のいる場所において、私同様に生きている存在が、現在の内に没入し、あらゆる形の記憶力を排して、物質の直接的かつ瞬間的な観照を獲得しうる場合にもつであらうような知覚である」 (MM31) 。

(2) 「脳は行動の道具であって、表象の道具ではないこと」を事実によって確認することができなかった、とベルクソンは言う。「というのも、純粹知覚は、定義により、私たちの器官と神経中枢を働かせて、現在の対象に向かうものであり、したがってあたかも私たちの知覚が脳の状態から発したのち、知覚とはまったく異なる対象に自己を投射するかのように、いつも万事が

そうなるからである」(MM78)。

物質の実在性についてベルクソンは次のように言っている。「対象の実在が直観的に知覚されようと、合理的に構築されようと、実際はまったく同じであろうから、ここでも経験的検証は不可能であった」(MM79)。

(3) ベルクソンは純粹記憶を「不在の対象の表象」(MM79)と規定している。

(4) Jean Hypolite, *Figures de la pensée philosophique*

(5) *Essai sur les données immédiates de la conscience*, (P.U.F.) → DI

Matière et mémoire, (P.U.F.) → MM

L'énergie spirituelle, (P.U.F.) → ES

と略した。

なお引用文は白水社「ベルグソン全集」に従った。

(博士課程学生)